

書評

原田憲一 著

精神症状の把握と理解

樋口輝彦

DSM-Ⅲが登場して約 30 年が過ぎた。この間、数度の改訂があったものの、基本構造は変わっていない。DSM は精神科診断学を大きく変えた。国際的な疫学研究や臨床研究が、それまで共通の診断基準がなかったために比較ができず、議論が深まらなかったことを考えると DSM の役割がいかに大きいか認識を新たにするところであるが、その一方で、それ以前の精神医学の中心であった精神病理学への関心が薄まったことによるマイナス面にも目を向けなければならない。

私は精神科医になって 36 年になるが、DSM-Ⅲの登場する前 10 年とその後の 20 数年を経験して今日に至っている。初期の 10 年間は初期研修をはじめ、臨床の場において重要とされたことは精神症状をいかに正確に記載するか、精神症状を総合して精神病理をいかに把握し理解するかであった。来る日も来る日も新患の予診をとり、症状をまとめ、状態像を整理し、鑑別診断をするというトレーニングを受けた。この 10 年間の精神病理のトレーニングはその後、DSM-Ⅲ、Ⅳの時代になっても大いに

役立ったように思う。DSM での症状評価はともすると表層的になりがちである。症状の捉え方やその意味を身につけておくことは重要である。「精神病理は難しい」と思われがちであるが、この本を読むと大変わかりやすく書かれていることがわかる。しかも、これだけは知っていてほしいと思う基本的な事柄がすべて含まれている。まさに、初期トレーニングにもってこいの書と言える。

しばらくの間お目にかからなかった「精神病理学の基本」を扱った書物にであって大変嬉しい思いである。精神科医療に携わろうとするすべての職種の方に必読の書物と言っても言い過ぎではない。記述はやさしく書かれているが、内容は大変濃いものである。著者自ら序において述べられているが、この本の目論見は「臨床症状とその理解」にある。そして、その目論見は完璧なまでに実現されている。

(国立精神・神経センター)

●四六判 312 頁 2008 定価 3,360 円(本体 3,200 円+税) 中山書店